



Circolo Mandolinistico Flora

チルコロ・マンドリニスティコ・フローラ

第47回定期演奏会

指揮◎高橋 五郎

友情出演：プレットロ・ロマンティコ有志(名古屋)

2012
11/18 sun 14:00 開演

仙台市青年文化センター コンサートホール

主催 チルコロ・マンドリニスティコ・フローラ

後援 (社)宮城県芸術協会 日本マンドリン連盟 仙台日伊協会

 河北新報社  仙台放送  TBC東北放送

第47回定期演奏会によせて

主宰：高橋五郎

本日は、私たち、チルコロ・フローラ「第47回定期演奏会」にご来場くださりましてありがとうございます。

本年は日本マンドリン界に多大な功績を残された中野二郎先生の生誕110年にあたり、6月には、中野先生が指導された「プレットロ・ロマンティコ」主催の「中野二郎の世界」記念演奏会にお招きを得て、私たちのメンバーは全員、名古屋でのコンサートに参加いたしました。

振り返れば中野先生と仙台は縁が深く、昭和6年仙台で活動していたマンドリン音楽のパイオニアの一人、澤口忠左衛門氏の「アルモニア合奏団」5周年に招かれ客演しています。

その後、私の恩師田中常彦先生のご紹介で中野先生宅をお訪ねして、いろいろお話をお伺いして、その造詣の深さに感銘をうけました。その時、巨匠の前で緊張していた私に、「年齢の差はあっても、お互い同じマンドリンを志す者、即ち同志であるから、あまり遠慮しないように」という言葉が印象に残っています。昭和50年、田中先生が亡くなられて、尊敬するマンドリニストは中野先生唯一人となってしまいました。中野先生は直接の門下生でもない私にご厚情を寄せていただき、平成12年99歳のご高齢でお亡くなりになる直前まで、楽譜など多大なる恩恵を賜りました。

今回の演奏会は世界的にも例のないマンドリン研究家中野二郎先生を偲ぶステージを中心にプログラムを組みました。平成5年、私たちの第28回定期演奏会に、当時91歳の中野先生を客演指揮者としてお迎えしました。その際、マンドリン音楽の方向性について貴重な一文を頂戴致しました。先生のマンドリンへの思いの一端を知っていただきたく、一部分ではありますがご紹介したいと思います。

我々はマンドリン音楽に愛着してやっているのである。少なくとも奏者、指揮者が、何ら感銘、感動なしに演奏したものが、聴く人に感銘を与えられるわけがない。近頃は一方的に刺激の強いものに嗜好が傾いており、或いは未だ曲芸的な技術が喝采されるようであるが、マンドリン音楽はロマン華やかな時代に開拓した音楽で、其処にこそ最大の魅力あるわけで、私が年齢を顧みず御地に伺う気になったのは、唯々そこを強調したいのに外ならない。

末筆ながら本演奏会に「プレットロ・ロマンティコ」有志の方が友情出演してくださいました。部員一同感謝申し上げます。

中野二郎



1902年4月10日瀬戸市生まれ。1920年愛知県立工業学校図案科を卒業、名古屋高等工業学校建築科に助手として入るが中退。初任給で買ったマンドリンに魅せられて独学でマンドリンとギターを習得、大正末ごろから独奏家として活躍。1941年アルゼンチンギタリスト協会の会員に推薦される。一方作曲の分野では、ギター独奏曲、マンドリン独奏曲・合奏曲・童謡などを作曲しその数は数百曲に及ぶ。又、自作品をイタリアで出版したり、1954年には国際ギターコンクール（イタリアギター協会）の作曲部門で“バガニーニの主題による30の変奏曲”が入選。1945年から20年間、NHK名古屋放送管弦楽団専属指揮者となる。1958年ギター之友社より『ギター音楽功労者』の第1回表彰者となる。同年愛知県教育委員会より文化功労者（音楽部門）として表彰される。1963年～1984年同志社大学マンドリンクラブ講師。

1981年永年にわたる優れた音楽活動により名古屋市芸術特賞を受賞。1985年には1万4千余点に及ぶ楽譜のコレクションを同志社大学図書館に寄贈。1988年勲五等双光旭日賞を叙勲。「イタリアマンドリン百曲選」「古典マンドリン合奏曲」等を出版し、我が国のマンドリン合奏界にレパートリーの拡大に大きな力となった。2000年6月10日 99歳で永眠。（写真は白寿の祝賀会にて）

∞ プ ロ グ ラ ム ∞

I. 中野二郎の世界 (作曲作品の中から) ————— 指揮 高橋 五郎

春のお祭り	中野 二郎
五月雨るる日の憂うつ	中野 二郎
丘の教会堂	中野 二郎
漁村の一夜	中野 二郎
1. 月と蟲と波と	
2. 草角力	
3. 漁火	
4. 踊りの稽古	

II. ロマン的なイタリア・マンドリン・オリジナル音楽より ————— 指揮 高橋 五郎

イ短調の前奏曲 Preludio in la Minore	カルロ・アレグレッティ Carlo Allegretti
C.P.O. ラブソディ C.P.O.R hapsody	ステファノ・スカルツィーナ Stefano Squarzina
1. 都会的な前奏曲 (Preludio Metropolitano)	
2. シャンソンⅠ (Prima "Chanson")	
3. 間奏曲 (Interludio)	
4. シャンソンⅡ (Seconda "Chanson")	
5. 真夜中のサンバ (Samba di Mezzanotte)	
夏の庭 黄昏 Giardino D'Estate - Crepuscolo	プリモ・シルヴェストリ Primo Silvestri

III. 中野二郎の世界 (編曲作品の中から) ————— 指揮 高橋 五郎

華燭の祭典 Festa di Nozze	ジュゼッペ・マネンテ Giuseppe Manente 中野二郎 編曲
1. 人々の祝福 (Movimento di gionia nel popole)	
2. 教会にて (In Chiesa)	
3. 家族の祝宴 (Festa in Famiglia)	
怯える小鳥 L'Uccello Impensierito	ジュゼッペ・フィリッパ Giuseppe Filippa 中野二郎 編曲
ゴンドラ漕ぎ手の唄 セレナータ Chant des Gondoliers - Serenade	チャールズ・アクトン Charles Acton 中野二郎 編曲
麗しきイタリア La Bella Italia	チャールズ・アクトン Francesco Gemme 中野二郎 編曲

I・Ⅲステージ プレットロ・ロマンティコ有志友情出演

アンコール① 小さな古風な世界 より第5楽章「Finale (フィナーレ)」 Piccolo Mondo Antico ----- 5.Finale	S.スカルツィーナ S.Squarzina
アンコール② 浜辺の歌	成田 為三/中野二郎編曲
アンコール③ Canta Sirena 【カンツォーネメドレー】	高橋五郎編曲

曲目解説

漁村の一夜

中野二郎 (1902～2000)

私は小さい時体が弱かったので、小学校三年の時(明治四十四年)三河の漁村で医院を開業していた叔父の家に預けられた。叔父は一年足らずの間に早逝していったので、再び名古屋に舞い戻ったのであるが、私にとってはその間の感慨は深い。庭には蘇鉄(そてつ)や棕櫚(しゅろ)が茂り赤い蟹が沢山這っていた。その頃はまだバスも電車もなく船が唯一の交通機関であったが、その度船場に行く道は海岸づたいの所もあり、玉蜀黍(とうもろこし)畑の細道もあった。芒(すすき)の生い茂った堤防、磯の香の強い砂道、波の音の中にも案外蟲の音はきこえるもので之が「月と蟲と波」となった。

石垣の上に丈の低い板塀がありその向こうはもう波が打ち寄せており、近くで溺れたこどもの供養に石地藏が立っていた。その砂場ではこどもたちが角力をとって遊んでいた。相馬御風の童謡に「いさりび」というこんなものがある。

くらいさびしい夜の沖
いかつり舟の灯が見える
どれがおうちの舟だろう
いくつもいくつも灯が見える。

お祭が近づくと村のお宮でも笛や太鼓の稽古が始まる。一日の仕事を終えると夕方からあちこちで踊りの稽古を始める。一年一度のお祭りは村人にとってこんな楽しい日はない。私はこの曲のモチーフを祖母から聞いた神楽囃子のひとふしから探った。

(中野二郎解説)

イ短調の前奏曲

カルロ・アレグレッティ (1885～1965)

作者アレグレッティはイタリアのセヴィリアーノに生まれた。彼の家は著名な音楽一家で、アレグレッティも若い頃からピアノ、フルートの演奏活動を行った。1925年、イタリア北部に位置するブレシアに居を移し、同地のマンドリン合奏団「C. クワランタ」の指揮を務めた。

本曲「イ短調の前奏曲」は1973年、高橋五郎がイタリアマンドリン遊学の時、同マンドリン合奏団から「巡視兵のセレナータ」と共に贈られた。本曲は日本では同志社大学が初演したが、その後あまり演奏されていない。アレグレッティ特有のセンチメントなメロディは美しく、各地で演奏してほしいと思う。

(高橋五郎解説)

C.P.O ラプソディー

ステファノ・スカルツィーナ (1966～)

作者スカルツィーナは、G. フレスコバルディ音楽院でオーボエを専攻した。1990年より作曲研究に没頭する一方、ミラノ市立音楽院、G.B. マルティーニ音楽院(ボローニャ)で指揮法を学び、マンドリン合奏団「ジーノ・ネリ」の他、オペラ・管弦楽・吹奏楽で活躍している。

本曲は、マンドリン合奏団「ジーノ・ネリ」の為に、2000年11月に作曲された。2004年11月に一部改訂された。当初は第5曲となる「真夜中のサンバ」が完成し、最終的に現在ののような組曲形式となった。「現代的なリズムや特殊奏法」と「憂いや懐かしさを表現したメロディー」が共存し、終曲のサンバで華やかに終わる。

(高橋五郎解説)

夏の庭 — 黄昏 —

プリモ・シルヴェストリィ (1871～1960)

作者シルヴェストリィは、今世紀初めからマンドリン合奏曲を多数発表し、一時イル・コンチェルト誌の主幹をしていたこともある。

本曲は1941年の作曲コンクールに第三位受賞した作品で、原曲の編成はクワルティーノ、マンドラコントラルト等も入り、第一、第二マンドリン、マンドラ、マンドロンチェロが二部至三部に分割される程の大きな編成になっている。後期に作品はいずれも大編成になっているが、時既にイタリアではマンドリン音楽そのものが衰退して、之等が上演されることもなく陽の目をみていない。題名に相応しい幽遠な叙情曲である。

(中野二郎解説)

華燭の祭典

ジュゼッペ・マネンテ (1868～1941)

作者マネンテは、音楽家を父として生まれ、王立陸軍学校付属の軍楽学校に入り、後にローマの聖チェチリア高等音楽学校を抜群の成績で卒業、歩兵第60聯隊軍楽隊長を拝命した。

この頃(1896年)吹奏楽「交響的間奏曲」、序曲「今と昔」を発表、そして1903年に歩兵第3聯隊軍楽隊長となり「降誕祭の夜」、序曲「国境なし」の力作を発表、特に三楽章に亘る幻想曲「華燭の祭典」はイタリアの著名な作曲家ボルゾーニ、ヴォルフ・フェラーリ等の賞賛を得た。四楽章に亘る交響曲「マンドリン芸術」は「古典的形式に依る交響楽」とも呼ばれ、マンドリン楽では至宝のものでシヴォリ音楽院主催の作曲コンクールに受賞した。1908年イル・プレットロ誌主催の作曲コンクールで幻想曲「秋の夕暮」が入選し、1909年序曲「メリアの平原に立ちて」が第2位に当選している。

(中野二郎解説)

麗しきイタリア

フランチェスコ・ジェムメ (生没年不詳)

イタリアの古くからの言葉に「ナポリを見てから死ね」と言うのがある。それ程ナポリは美しいということであろうが、何もナポリに限らず美しいところは無数にある。古来幾多の詩人、画家、音楽家がイタリアに旅しての感激の所産は数え切れないが、それにもましてイタリア自身が芸術のあらゆる面に大家を輩出しているのは美しい環境にある何よりの証拠と言えよう。最近のご多分に漏れず観光地として、かの名高いベニス^①の海も工場のヘドロに汚されて掃海船が右往左往する有様と伝えられるが、中世以来の壮麗な構造物、美しい彫刻は至る所に在り、絢爛たる歴史を我々に語りかける。

作者ジェムメは19世紀末のイタリアの軍楽隊長でソルモーナの長官アントニオ・ドット・デ・ダウリ氏に恭しく献げられている。1896年の出版で表紙にはローマのサンピエトロ・フィレンツェのヴェッキオ宮、ミラノ大寺ヴェスヴィオを望むナポリが描かれてある。同じ題名でベルレンギもワルツのマンドリン合奏曲を書いているが、本曲のほうが遥かに面白く力作である。

(中野二郎解説)